

リベルテール

6月号

目次

詩	逆光(黒万斗)	1
巻頭言	六月の暦	1
バク・ニンと現代革命(3)	P・アブリッチ	2
アナキストを自称すること		
及び大衆との分離について		
野上弘		5
松尾邦之助逝いて一年	三浦精一	10
映画	サンチャゴに雨が降る	11
野火		13
M・バク・ニンよりS・ネチャーエフへ(2)		15

Libertaire VoL, VII. No. 7

無政府主義誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和51年6月15日発行第77号

リベルテール 定価一〇〇円(郵便料共)

■リベルテール Le Libertaire
■1976年6月15日発行 VoL, VII No. 7
■編集兼発行者 三浦精一
■発行所 東京都練馬区大泉学園町2190
萩原晋太郎方 リベルテールの会

毎月1回15日発行 振替 東京133830番三浦精一

・ 逆 光

(黒万斗)

男のまゝに影は長くのびていた。
堅い椅子に腰をおろして生きていた。
半分つぶれた眼で、
黒いオブジェを凝視していた。

意味のないものに意味づけをするように、
男は独り静かに自分を規定した。

黒、それは光の宝石箱・・・。

黒は地上の永久物であり絶対物である。
どのような原色をもつてしても

黒いオブジェは不変であり不動である。
それは一つの偉大な思考である。

この残された男の最後の仕事は、
血塗られた虐殺の世界地図に墨を塗りたく
ることであった。

この無名者の戦名者の戦慄すべきヒューマニズムは、
一輪の天空に囁く宵待草であり、
微風に消される小さな咳であった。

六 月 の 暦 こよみ

暦の上で六月になると、自然の運行は例年の通り天に梅雨空を上げ、地に緑の群生をもたらす。鳥の栗の木は葉のあざやかな新緑よりひととき淡いひわ色の細長く反り返った花をつけ、樹液の青い匂いが吹き出している。ものすべて暗緑色で降り降り降らずみの気圧配置はただでさえ重苦しく、その素膚にベト著く感じはわが風土の特色だろう。

二月四日以来、政治情況はロッキード事件で膠着している。日常生活に何のかかわりもないあの事件がギャグ、漫画、デモ、記事、等になって日本国中を駆け巡っている。それでいて事件の核心は容易に判明しない。推測の領域ではある線まで判るのだが、いよいよゆる状況証拠までは揃っていないがら自供に当るキメ手がないのだろう。これはわれわれ民衆が事件に巻き込まれる時と正反対の様子である。われわれの場合はいつだって有力なキメ手の自供が用意され、状況証拠は後からつけられて来る。保守義務や人権擁護など論外であろう。なぜこんな事になるのだろう？ 言うまでもなく政府高官に関する事件だからである。そこで三権分立のたてまえが墨守され、司法権に敬意が払われ、高級公務員、国会議員、閣僚閣下には与えらる限りの便宜が計られる訳だ。それによって時間は政治的配慮がよしとするまで延長され、事件はいよいよ複雑化され、素人ではあきかきてサジを投げるまで拡大再生産され、因果関係はネズミ算式に膨張して、関係者のすべてが黒であると同時に白、つまり灰色あたりで打止めになるかも知れない。幸なるかな正義を求める人、その人に正義は与えられよう。しかし敗戦後30年してあの時代の文書が公開されたように、この事件の関係文書もあと30年しなければ公開されないとすれば、正義を求めるのにどんな意味があるだろうか。この国の保守党は何もしない事で存続して来た。消極的には自由の名において民衆のレイゼ・フェイユ（放任）に委せ、その積極面でのやる事はすべて反動的衝動からでたものだった。今ようやくその保守主義の中に否定派が現われたようだが、ヘーゲルの弁証法では否定は肯定のまま立枯れることがあるのを教え、バクは否定が肯定の契機になるとしていたから、結局多くは望むべくもない。世の中、執権を下ろして革新が保守化し、保守が造反して改良化されるのだから、庶民は物価高に悩まされつついつまでも外野席で見ているだけなのだろうか。

(文責 はしもと)

黒色戦線社

天皇制破壊への渦動

壇谷雄高・大島英三郎ほか 300円

難波大助大逆事件

虎ノ門で皇太子（現天皇）を狙撃 900円

何が私をかうさせたか

金子ふみ子獄中手記／壇谷雄高跋 2000円

反逆者の牢獄手記

大杉栄・朴烈ほか10氏 200円

日本無政府主義運動史 第一編

石川三四郎ほか3氏 350円

自治民範 (全)

権藤成卿著作集／第1巻 3000円

農村自救論・日本農制史談

権藤成卿著作集／第2巻 3000円

労働運動《復刻》(新聞版)

第1～4次／大杉栄ほか編集発行 5000円

労働運動《復刻》(雑誌版)

第5次／近藤憲二ほか編集発行 [近刊]

大杉栄・伊藤野枝追悼号

『労働運動』大正13年3月号復刻 400円

ディナミック

石川三四郎個人誌復刻 3000円

差別とアナキズム 宮崎 晃著

水平社運動とアナ・ボル抗争史 1600円

黒色戦線《復刻》

アナキズム文芸運動誌 5000円

黒色青年《復刻》

アナキズム最高の理論誌 2500円

群馬県伊勢崎市中町和田 大島英三郎方
電話0270(24)0776 振替／字都宮11015

資料室・共学読書会室 東京都大田区西蒲田7-61-8 エンリコビル4階
電話03(735)1246 毎月第2・4日曜午後1時より共学読書会(公開)

バクーニンと現代革命(3)

P・アヴリツチ

バクーニンはかなり現代にあてはまるもう一つの点でマルクスと意見を異にしていた。バクーニンは即時の革命の強烈な信者であった。彼は革命諸勢力が徐々に、時の経過とともに登場するであろうという見解を拒絶した。彼が要求したものは、実際のところ、「自由を今」であった。彼は現存体制と妥協することを可としなかった。

古い秩序は腐敗し、それを徹底的に破壊することによってのみ救済を達成することができると、彼は論じた。いかなる形式の漸進主義や改良主義も効果なく、緩和剤と妥協は無益であった。バクーニンの夢は即時の普遍的な破壊、現在のすべての価値と制度の転覆、その廃墟のうえに新しいリバタリアン社会の創造という夢であった。彼の見解では議会制民主主義は、人間が経済的搾取に従属させられているかぎり、恥じ知らずの虚構であった。スイスやアメリカ合衆国のような国家のなかで最も自由な国家においてすら、少数者の文明は多数者の苦痛と退廃にもとづいている、と彼は断言した。「私は憲法も法律も信じない」と彼は言った。「世界で最良の憲法すら私を満足させることはできないであろう。私たちは異な

る何ものか、つまり、靈感、生命、法律のない、それ故に自由な新しい世界を欲するのだ」。

民衆を代表しているという議会制民主主義の借称を拒否するにあたって、バクーニンは、その伝記家E・H・カーが記しているように、「一九世紀にそうであったよりも、二〇世紀になじみ深くなる言葉を語っていた」。なお別の近代的な調子を響かせながら、バクーニンは戦争のさなかに——そして最終的には世界戦争のあいだに——民衆革命の理想的な契機を見てとった。一八七〇年、彼は普仏戦争を、国家が粉碎されコミューンの自由連合がその廃墟のうえに生起するであろうアナキズム革命の先駆者とみなした。フランスを救済することができるとの事柄は「人民大衆の基本的な、力強い、熱烈に精力的な、アナキスティックな、破壊的な、無制限の蜂起」であると「一フランス人への手紙」に書いているが、これは一九六八年五月のダニエル・コーンバンディとその仲間の反逆者たちが熱狂的に同意するであろう見解であった。バクーニンは、彼以降のレーニンと同様に、民族戦争は社会的な反抗に変革されねばならない、と信じていた。彼は、さし迫っている、ブルジョア世界を破壊するであろうと感じていた全面的なヨーロッパ戦争を夢みていた。もちろん、彼のタイミングは誤っていた。かっ

てゲルツェンが指摘したように、バクーニンは習慣的に「妊娠三カ月を九カ月と誤っていた」。しかし、第一次世界大戦が古い秩序の崩壊をもたらし、いまなおその役割を演じねばならない革命諸勢力を解放したとき、彼のビジョンはついに実現したのである。

しばらくの間、二〇世紀の社会動乱のプロトタイプでロシア革命に焦点をあてることにしよう。実質的に、これはバクーニンがおよそ五〇年前に予見していた自然発生的な「大衆反乱」であった。一九一七年に、ロシアは政治的な権威の事実上の瓦解を経験し、リバタリアン・コミューンの基盤を形成するであろう労働者と農民の評議会が登場した。レーニンは、彼以前のバクーニンと同様に、旧体制の残存物を一掃するロシア社会の未熟な、教育を受けていない諸勢力を刺激した。バクーニンとレーニンは、気質や思想の相違にもかかわらず、二人がどうしようもなく反革命的であるとみなしていた自由主義者、あるいは穏健な社会主義と同盟することを拒否することでは、同一であった。両者は骨の髄からして反ブルジョア、反リベラルであった。バクーニンと同じく、レーニンは発展の延引したどんな資本主義段階もない即時の社会主義を求めた。彼も、世界革命の中心は後進的な農民ロシアであろう、と信じていた。そのうえ、彼は「四

月テーゼ」において多数のきわだってバクーニン主義的な次の諸命題を提唱した。世界の変革は資本主義制度に対する革命闘争となる。パリ・コミューンに範をとったソヴェト制度のために議制政府の否認。警察、軍隊、官僚の廃止。収入の平等化。「二月のものよりも千倍も強力な解体と革命」のためのレーニンのアビールはバクーニン主義の色彩を明らかに帯びていた——それはきわめていちぢるしかったので、ペトログラードのあるアナキスト指導者が、レーニンは彼が国家を掌握するとすぐに「国家を消滅させる」つもりである、と信じていたほどであった。

そして、実際のところ、レーニンの最大の偉業はロシアの革命的な伝統というアナルコ・ナロードニキの根源にもどること、プロレタリア革命が全く意味をなさない相対的に遅れた国の状態に自分のマルクス主義理論を適応させることであった。レーニンの内なるマルクス主義者は彼に忍耐するように、史的唯物論の諸法則と呼応してロシアを進展させるように説いたけれども、内なるバクーニン主義者は、土地に飢えた農民、零落したインテリ、すなわち、上述したように、マルクスが軽蔑のみを表明していた社会分子という戦闘的なエリートとの革命をプロレタリア革命に連携させることによって革命がた

だちになされるにちがいない、と主張した。レーニンの正統マルクス主義者の盟友たちがレーニンをアナキストになり、「バクーニンの王位の継承者」になったと非難したのは驚くべきことではない。また、数年後に、指導的なボルシェヴィキの歴史家が、バクーニンは「ヨーロッパのアナキズムだけでなく、ロシアのナロードニキの一揆主義、それ故に、そこから共産党が派生するロシア社会民主党の創始者であり」、バクーニンの方法は「多くの点においてソヴェト権力の出現を予測し、大ざっぱにいつて一九一七年の大十月革命の進行を予見していた」と述べることでできたのも驚くべきことではないのである。

しかし、たとえバクーニンがロシア革命のアナキステイックな性格を予見していたにせよ、その権威主義的な諸結論をも予見していた。一九一七年は、バクーニンが希望していたように、自然発生的な大衆蜂起をもって始

まったとしても、バクーニンが恐れていたように、新しい支配エリートの特権をもつて終った。マハイスキー、ジラス、あるいはジェイムス・バーナムのずっと以前にバクーニンは知識人とセミ知識人との「新しい階級」が地主や資本家にとって代り、民衆にその自由を拒否するであろう、と警告していた。一八七三年に彼は、プロレタリアートのいわゆる独裁の下では「共産党、すなわちマルクス氏とその仲間たちの指導者が彼ら自身のやり方で人間性の解放に着手するであろう。彼らは権力を強力な手に集中するであろう。彼らは単一の国立銀行を設立し、その手中にすべての商業的、工業的、農業的、科学的生産すら集中し、かくして大衆を、新しい特権をもつた科学的、政治的階級を構成するであろう国家技師が直接的に指揮する二つの軍団——工業的、農業的——に分割するであろう」と、驚くべき正確さで予言していた。

(つづく)

アナキストを自称すること 及び大衆との分離について

野上 弘

江藤氏によれば、「民衆」＝「大衆」とは「支配者をのぞくすべての人々」である。それは、被支配者をさらに前衛党と大衆とに分離するマルクス＝レーニン主義とは対立する考えかもしれない。しかし、私から見れば、江藤氏もマルクス＝レーニン主義者も、一つの同じ立場に立脚している点では同じであると思う。すなわち、支配者階級―被支配者階級という関係を絶対的対立関係とみることにし、被支配者階級は本質的に反権力主義者であり、無支配社会を求めている存在である、という前提である。マルクス＝レーニン主義者の前衛党が、彼らの言うように支配者へ転化するはずのないものだとなれば、このような前提なしに彼らの前衛党論が成り立つことはありえないであろう。すなわち、もし被支配者階級の本質が反権力主義者ではないとすれば、前衛党は新たな支配者へと転化するもの以上ではありえないであろうし、江藤氏の大衆主義もまた、支配者としての前衛党への補完物という役割を果たすことになる。もっとも、支

配者―被支配者の対立を絶対的なものとする考えはアナキスト内部にも存在したことも事実であって、例えば、『黒色青年』第一号中の「圧迫する者と、圧迫されるもの。搾取する者とされるもの。それは社会組織内に確固たる階級を構成する。而してそれは、永久に利害を共にすることの出来ない二つの階級である。妥協の余地は見出せない。存在するのは、ただ二階級間の闘争である。……」といった文脈中にもうかがうことができる。はたして、被支配者階級は本当に反権力主義なのであるか。この疑問に答えるために、未だ支配―被支配の関係が固定化されていない無頭制社会における、権力主義とそれに対する反作用との関係を見てみたい。無頭制社会に生活する人々は、何ら権力主義的傾向を持たないのであるか。彼らもまた、ルグバラ族の一人が言うように、「だれも八偉くVとして強くなりたいたと試みる」のである（おそらく狩猟民は除かれるかも知れないが）。すなわち、無頭制社会においても権力主義的傾向は存在するのであり、「私は権力の上に更に権力を求める、永久の休まない欲望、死において止むようなこの欲望を全人類の一般的性向と考える——というホップスの一般的言明を、すべての人間社会には権力を志向する諸個人が存在する、というように理解するならば、社会的平等、

そして特殊に無頭制についての上の説明はホッブズのこの言明に調和する。リーチはこの言明が未開の諸社会にも妥当することを強調し、政治的諸制度をこの事実を看過して機能主義的に《説明》するのに反対した（『支配の発生』O・ジークリスト）。あるいは、権力を志向しない人が存在するかも知れない。しかし、「権力を志向する諸個人」が無頭制社会においては大多数なのである。無頭制社会から権威が固定化され、支配者―被支配者の分裂が生じたとして、これら大多数の権力を志向する諸個人の総てが支配者となる訳ではない。ほとんどは被支配者となるのである。そして、これら支配者になりそこなった「権力を志向する諸個人」は、被支配者となることによって、たちまちその権力志向を失い、反権力主義者となるのであろうか。

もちろん、これらの社会は権力主義的傾向によってのみ規定されているのではない。それどころか、強力な平等規範のもとにあり、権力を獲得するための努力や富は、一般的な平等規範に違反するものなのである。「平等意識は、社会的な平等が強すぎると感じられるとき、特に老人達の世代の重圧があまりに重苦しく感じられるとき、全地域で集団的な防衛ならびに追及の反作用が起りえた」（『支配の発生』）のであるが、しかし、それは彼らが

一切の権力主義的傾向の存在しない社会を求めているということを意味する訳ではないのである。「支配の拒否は内面化された社会倫理的態度として解釈されない。平等規範の上に立った方向付けは、主として他利主義的動機づけに起因するのではなく、社会的圧力によって強制される。傑出するための努力は制裁に対する恐れによって限界づけられる」のであり、他方、「富者、権力者、お偉方に対する反作用の中心的動機は嫉みである」。嫉みそのものは、富者、権力者、お偉方といった者が存在していることの否定ではなく、お偉方達の優越感に対応する、そうではない者たちの権力主義的反応にすぎない。無頭制社会においては、権力志向と平等意識とは対立するものとして固定化されるのではなく、それは調和、あるいは統合されたものでもあるのである。

この権力志向と平等意識の統合ということは、権力主義が平等規範なしには存在しないことから言えるであろう。「底意ある、計算された寛大はメラネシアの実力者をつくりだす。だが、最後には、それはまた彼の破壊の原因となり、彼が中心的存在となる政治、経済システムに対する制約となる。その他の手腕とか、個人的資質は威信を高めるために求められる。それは呪術的能力、修辭的能力、またりっぱさなどだが、しかしそれらに比

べて経済的な知略が通常一番重要なものである。その知略とは豚、野菜、貝貨などの品物をため込み、騎士道的寛大さで自分の名を上げるために人びとに分配することである」（『部落民』M・D・サーリンズ）。しかし、このような実力者になるための方法が成立するためには平等規範がなければならない。平等規範における贈与とは、互惠性である。それは与えられた者は、与えなければならぬということである。すなわち、このような平等規範があるから、一方的に品物を与えられた者は、そのお返しとして、従者になったり、実力者を讃美したり、手伝ったりするのである。経済的にみる限り、部落社会では社会的な平等があればあるほど、経済的には平等となるのであり、このことは、権力主義の目的が物を対象とするのではなく、人間そのものを対象とするものであることを示している。また、お偉方の優越感がその富との交換によって得られるのだとすれば、優越感と富とは等しい。そして、富とはもはやその物質的使用価値に等しいものとしてあるのではなく、それを越え出たものとしてあるのである。それ故、商品と商品の交換は、単にその使用価値と使用価値との交換を意味するものではない。

結局、経済的には平等になってしまうのだとすれば、

彼らは平等規範を元手にして、権力主義という利潤を上げたのだといえるだろう。それはまた、権力主義の平等な享受をも意味する。「分節社会においては一時的な社会的差異は存在するが、しかし、これは世代内ではないとしても、世代間で相殺される」のである。すなわち、長期的にみれば、一人が他の者よりも多くのものを所有しない社会において、それでも貧富の差があるとすれば、それは一人の人間における年代別における貧富の差に還元できるのであり、誰でも年をとるにつれ富を増し、妻を何人かめとり、お偉方となっていく、ということなのだ。つまり、無頭制社会における平等規範とは、単に、権力主義の享受の平等を求めるものでしかないのかもしれない。

もしそうだとすれば、無頭制社会においては、権力主義そのものは、共同体全体によって公認されたものとして存在していると言ってもいいであろう。この権力主義の共同体による公認ということは、支配者、あるいは指導者の外部からの導入といった事実によっても支持される。「外来者には《平等性の障害》を跳び越えることが容易にできる」（『支配の発生』）にもかかわらず、彼らのある者は、自発的に外来者に従属するのである。その場合、外来者とは個々の外来者か少数集団でなければ

ならないのであるが、それらの外来者に対し、共同体そのものが自発的に従属するのである。すなわち、彼らは共同体の全員が従属的立場におかれるにもかかわらず、外部から彼らの共同体に指導者なり支配者を導入したのであり、それは権力主義が共同体そのものによって公認されたのだといつてよいであろう。このような共同体による権力主義の公認ということは、さらにフレイザーが『金枝篇』で記述しているシルック族の神聖な王や、一定期間の後に殺される王にも見ることができているではないか。そこにおいて真に神聖なるものは王個人ではなくて、王位そのものであり、この王位の神聖さは、王や支配者によって維持されているというよりは、共同体全体によって維持されているといつてよいであろう。おそらくそれは、権力主義の共同体による公認ということをし、シンボリックに示しているにちがいない。

以上、無頭制社会の分析から分ることは、被支配者階級の反権力性というものは様々なレベルとしてあるだろうということである。それは単に支配者階級の強化を規制するだけのものかも知れないし、権力主義の平等な享受を求めるものかも知れない。もちろん、それは一切の権力主義の廃絶を求めるものかも知れない。そして他方、権力主義の公許性ということからも、被支配者階級の本

質は反権力主義であるなどと言い切ることはできないであらうし、被支配者階級の反権力性は諸個人によって異なるものであらう。それは諸個人によって様々なレベルで現われるものにすぎない。

江藤氏の論旨でもう一つ重要なことは、大衆主義の持つ全体主義的構造である。そこにおいては、総ての人間が大衆という全体に統合されるのであって、分離という視点は入ってこない。それに対して、分節社会においては自由意志による分離ということが行なわれている。たいていは少数派が多数派に対して異議を申し立てて去っていくのであるが、「互酬連鎖を切断したり分離して行くぞ」という威嚇は、数的優勢さなければその他何かの力の優勢に基づいた搾取に対する重要な規制の一つとなっている（『支配の発生』）のであり、権威の過度に強いとみなされる権力志向を回避するために、集団が孤立化したり転出したりすることがしばしばある。レンドウ族がアルール族の人間を彼らの指導者として招聘したとき、支配を嫌う数多くのレンドウ族リニージの分離が妨げられていなかった。これは国家支配の全体主義性と対照的である。国家においては、その支配を嫌う集団が国家から分離しようとしても認められない。このような

国家的全体主義が発生したのは無頭制社会以降のことであり、中央権威の発生と支配者―被支配者の固定化と無縁ではないと思われる。それは、無頭制社会における権力主義の公的性が、支配者―被支配者の関係が固定化されて権力主義の享受の平等性を失うと同時に、弱まった結果、それにかわる共同体の結合力として、強化されていったのであらう。それは共同体そのものにおいても共同体の分解に対するものとして必要であったかもしれないが、それ以上に支配者にとって必要なものであった。自由意志による分離を認めることは、結局支配者が彼らだけになってしまう可能性を意味しているからである。実際、ローマにおいては、紀元前四九四年と言われているが、貴族支配に反抗した民衆が、ローマ郊外の丘に集まり、自分達の都市を建設しようとしたのである。もっとも、護民官制度を認めさせることによって、民衆は貴族と妥協したのであるが、それは権力主義というものが、被支配者である民衆によっても公認されていたことを示している。すなわち、民衆は権力主義そのものを否定しようとしていたのではなく、ただその内容を問題にしていたのである。ただ、そのことは、支配者階級の固定化が民衆の反撥を呼んだことだけは確かである。被支配者にとっては、権力主義そのものは認められても、支配者

が固定化され、ますますその立場が強化されていくことは認められなかったものであり、それに対し、支配者は共同体を絶対化することにより、民衆の不满による分離を阻止しようとしたのである。大衆主義のもつ全体主義的構造は、このような国家のもつ全体主義を、被支配者の側から補完する役割をはたしているのではないだろうか。被支配者の反権力性が様々なレベルで現われるものである以上は、自己を大衆と位置づけても何も言ったことにはならないであらう。必要なことは、自分がどのレベルの反権力性の社会に住みたいと思っているのか、権力主義をどの程度まで認めるのかを明確にすることである。

支配者―被支配者の矛盾の絶対化は、無支配社会の絶対的理性化と表裏一体となって作用している。そして、それが人間における絶対的理性である以上、全体主義との結合も許されるわけである。それ故、アナキストが自己を大衆から分離するということは、自己の思想の目的すなわち、一切の支配なき社会を、もはや絶対的理性とは捉えないということをも意味するのだ。すなわち、アナキストがアナキストを自称し、大衆と自己とを区別するとは、分節社会において、ある集団がもとの集団の権力的傾向に異議をとなえて、分離していくということに他ならないのだ。